



**Data**

監督：高希希（ガオ・シーシー）  
 出演：陳建斌（チェン・ジェンビン）  
 ／于和偉（ユ・ホーウェイ）  
 ／于荣光（ユ・ロンガン）  
 ／康凱（カン・ガイ）／何潤東（ピーター・ホー）／陳好（チェン・ハオ）／リュウ・シャオフー／許文広（シュー・ウエンガン）／範雨林（ファン・ユーリン）

## 👁️👁️ みどころ

中国は何でもやるのがデカイ。1話45分で全95話からなる『三国志』の総製作費は25億円、製作期間は6年！

その第1～6話はほんの導入部だが、そこでも逆境に耐える強さや権謀術数の数々を学ぶことができる。全95話を観れば、きら星の如く登場する英雄・豪傑たちの人物像と生きざまを学ぶことができるはずだから、以降きっとあなたは千人力。

今最もそれが必要なのは私ではなく、菅直人総理以下の、頼りない政治家たち・・・？



## ■□■前は全20巻！今度は全95話！■□■

08年の北京オリンピック、10年の上海万博を見れば、中国はやるのが何でもデカイことがよくわかる。それは、本作の評論を収録するはずの『シネマルーム25』の表紙を飾る、威海の海に浮かぶ定遠号の勇姿を見ても明らかだ。この定遠号の建設期間は1年間、その費用は5000万元（約70億円）とのことだが、今回中国が総力を挙げてつくった中国ドラマ歴史超大作の決定版たる『三国志』は、1話約45分で全95話からなるDVDとして発売されるらしい。その製作期間は6年、総製作費は25億円というから恐れ入る。

ちなみに、私は04年7月11日に『三国志<国際スタンダード版>』（96年）の第1巻「劉備・関羽・張飛の義兄弟の誓い」、第2巻「呂布と貂蟬の連環の計」、第3巻「関羽、五関に六将を斬る」を鑑賞した（『シネマルーム5』145頁参照）。これは全20巻のうち

ち1～3巻をはじめて劇場で上映したものだが、今回は全95話。それをすべて観るのは至難のワザだが、とりあえず今回はその1～6話を鑑賞することに。



DVD『三国志』

<レンタル>2010年10月27日よりリリース開始

<セル>前篇：2010年12月10日DVD-BOX発売

## ■時代は？主役たちは？■

『三国志』全95話は大きく①第1～18話、②第19～32話、③第33～42話、④第43～57話、⑤第58～73話、⑥第74～83話、⑦第84～95話の7つに分かれている。したがって、今回私が観た1～6話はそんな『三国志』のほんの入口だけだが、さてその時代は？そしてまた、壮大なストーリーの主役たちは？

秦の始皇帝が中国を統一したのがBC221年。秦が乱れ項羽と劉邦が覇権を争い、結局劉邦が長安を都とする漢（前漢）を擁立したのがBC206年だ。前漢の全盛期は7代皇帝・武帝の時だが、紀元後8年の14代皇帝・孺子嬰の時に重臣の王莽によって滅ぼさ

れ、漢帝国はいったんは滅亡した。その後、漢王朝の皇族・劉秀（光武帝）が漢を再興したため、それが後漢と言われているが、その成立は西暦25年。その都は洛陽だ。しかし、後漢末期の西暦184年には太平道の教祖・張角が「黄巾の乱」を起こしたため、約400年間続いた漢王朝は風前の灯となった。魏・呉・蜀の三国に割拠した『三国志』の物語は14歳の劉弁が即位した西暦189年からスタートするが、さて物語最初の主役たちは？

今、後漢の相国として幼君を牛耳っているのは董卓（リュイ・シャオフー）。それに不満を持つ諸侯たちは18鎮諸侯軍（同盟軍）を結成して董卓に立ち向かおうとしていたが、目下そのリーダーとされているのが袁紹（許文広／シュー・ウェングァン）。さあ、董卓VS18鎮諸侯軍との戦いの行方は？

## ■英雄はどこに？豪傑はどこに？■

私が小学生時代から中国モノ、とりわけ『三国志』に惹かれたのは、そこにたくさんの英雄・豪傑が登場するため。つまり、本を読んでいるだけでそれぞれの人物像が浮かび上がり、血湧き肉踊るわけだ。そう『三国志』とは、それぞれ自慢の武器を駆使して戦う豪傑たちと、魏の曹操、蜀の劉備、呉の孫権の3大英雄をはじめとして、知略の限りを尽くして戦う英雄たちが見モノなのだ。

そんな視点で1話から6話を観ると、特筆すべき豪傑は呂布（何潤東／ピーター・ホー）。呂布と名馬・赤兎馬とは切っても切れない関係だが、その物語は追って展開されるはず。1～6話では董卓の養子となった呂布が18鎮諸侯軍の前に、1人立ちはだかる姿が描かれる。次々と18鎮諸侯軍の勇将たちが呂布に討ち取られる中、18鎮諸侯軍は為す術なく亀のように首をすぼめているばかり。そこで名を挙げたのが、たった3人で18鎮諸侯軍に参加した劉備（于和偉／ユー・ホーウェイ）、関羽（于榮光／ユー・ロングァン）、張飛（康凱／カン・ガイ）だ。彼らは「桃園の誓い」を結び、漢王朝の復興を誓ったが、何せまだ無名。しかし、2人がかりとはいえ、張飛と関羽が力を合わせて呂布を退散させた実力はさすが。その戦闘シーンは見応えがある。他方、こんな豪傑たちの闘いとは別に、打倒董卓で心を1つにしたはずの18鎮諸侯軍は諸將の思惑が食い違い始めたため、結果的に空中分解してしまうことに。そんな中、曹操が真の英雄と認めたのは、微力ながら高い志を示した劉備と呉の雄・孫堅（孫権の父親）（範雨林／ファン・ユースリン）だけだったようだ。

後漢末期も乱世だったが、2010年のニッポン国も乱世。2～3世紀には中国にこんなにたくさんの英雄・豪傑が出現したのに、さて今のニッポン国、英雄・豪傑はどこに？

## ■学ぶべきは、逆境に耐える強さ！■

全95話からなる今回の『三国志』は、「桃園の誓い」を結んだ若き日の劉備、関羽、張



(C) 中国伝媒大学電視制作中心、北京東方恒和影視文化有限公司

飛の時代から、魏の司馬一族が蜀も魏も滅ぼして晋を建国、さらに呉を滅ぼして三国時代に終止符を打つまでの約200年間を描く壮大な歴史絵巻。したがって、前半の風雲児・曹操や後半の華となる蜀の軍師・孔明をはじめとする主要人物たちはみんな途中で死んでいくことになる。それはそれで仕方がないが、『三国志』から学ぶべきは、逆境に耐える強さ。

私は世界的建築家・安藤忠雄氏の『連戦連敗』（東京大学出版会・2001年）が大好きだが、『三国志』の時代にはいかなる英雄であっても連戦連勝がありえないこと、戦には勝ったり負けたりがついて回することは当然。まして、最初から呉の雄として君臨していた孫堅は別として、これからのし上がろうとしている曹操や劉備には大きな力がないから、当初苦労したのは当然だ。ちなみに、劉備がやっと荊州で国をもつことができたのはずっと後になってから。他方、典軍校尉だった曹操も血気にはやって董卓を暗殺しようとして失敗したところから、大きな試練を迎えることに。1～2話ではお尋ね者とされた曹操の逃げ回る姿が描かれる。そんな状況下でも、たくましさと志を失わない曹操の生きざまをしっかり学びたい。奇跡の薩長連合を成し遂げた坂本龍馬が幕府から「お尋ね者」にされたのは当然だが、10月17日（日）にはいろは丸事件で「勝訴」したため、紀州藩からも命を狙われる龍馬の様子が放映されていた。董卓からの人相書きが出回っていた曹操は遂に捕まってしまったが、さあ、そこからしぶとく曹操はどのように立ち上がるの？『三国志』から学ぶべきは、逆境に耐える強さだ。

## ■□■王允、60歳の誕生日は？■□■

富国強兵政策に邁進した明治政府は日清・日露両戦争を勝利に導いたが、司馬遼太郎の分析によれば（？）、この頃は日本の官僚制度が最も機能した時代。つまり、今では諸悪の根源と言われている国家公務員制度にも、いい時代があったわけだ。しかし『三国志』を観ていると、日本の律令制は隋・唐の時代の律令制を真似たものだが、その前身が漢の時代の律令制にあったことがよくわかる。1～6話に登場する国家公務員の長が王允だが、暴虐の限りを尽くす董卓の前に、善良な公務員は萎縮するばかり。しかし、王允の60歳の誕生日祝いに集まった面々の思惑は？さらに、招かれてもいないのに曹操があえてその祝宴（？）に駆けつけたところから、思いがけない展開が・・・。

他方、中国では「ハニートラップ」に要注意だが、中国におけるハニートラップの原形が、王允とその養女・貂蟬（陳好／チェン・ハオ）が実行した「連環の計」。そのターゲットは董卓とその養子・呂布だが、1～6話では貂蟬と呂布が「一目惚れ（？）」し合うシーンが描かれるので、それにも注目。

ちなみに、私は2009年に60歳の誕生日を迎えたが、それは平均寿命が83歳にもなっている今の日本のこと。あの激動の時代に国家公務員のトップに上り詰め、60歳の誕生日を迎えた王允は立派なものだが、そのしたたかさから、今年64歳の菅直人総理は何を学ぶ？

## ■□■日本の政治家や高級官僚必見！■□■

呉宇森（ジョン・ウー）監督の『レッドクリフPart I』（08年）、『レッドクリフPart II』（09年）の大ヒットで、『三国志』を本格的に読んだことがない日本の若者でも、「赤壁の戦い」くらいは知るようになった。しかし、そこで天才軍師・諸葛孔明の神の如き作戦の妙に感心しているだけではダメ。その前半では、南下して迫り来る曹操の大軍に対抗するため、呉の孫権に対して劉備との連合を説く外交官としての孔明の役割に注目する必要がある。

島国ニッポンと違い、陸続きのヨーロッパ大陸でも中国大陸でも領土問題を中心とした国の存亡がくり返されてきたから、そこではどこと結んで、どこと戦うか？が大切。したがって、昨日の敵は今日の友、今日の友は明日の敵は当たり前。もちろん、日本でも戦国時代はそれと同じような時代だったが、日本では婚姻関係を結んだり、人質を出したりすることによって、できるだけ戦争を避け平和裡にコトを解決する傾向が強かった。しかし、ゲルマン民族やアングロサクソンそして中華民族やモンゴル民族は国を征服したら、その国の男は皆殺しにし、女はすべて奴隷にすることが当たり前？

『三国志』が描く200年間はまさに後漢の滅亡から、魏・呉・蜀の三国の成立と対立そして滅亡という動乱期だから、そこは権謀術数の宝庫。目下ニッポン国では普天間基地

をめぐる日米安保の弱体化問題と尖閣諸島問題に象徴される対中国戦略が大きな課題。そんな状況下、日本の政治家や高級官僚こそ、この『三国志』95話をしっかり鑑賞し、その中で展開される外交の妙や権謀術数のサマをしっかり勉強してほしい。



©中国伝媒大学電視制作中心、北京東方恒和影視文化有限公司

## ■ 『三国志』は、かっぱえびせん？睡眠不足にご用心！ ■

私はおやつ的なものは極力食べないようにしているから、ポテトチップスやかっぱえびせんの類はほとんど食べないが、かっぱえびせんのコマーシャルは「やめられない、とまらない」。ここでなぜそんなことを書いたかと言うと、『三国志』はかっぱえびせんだから。そのココロはもちろん、「読みだしたら止まらない。観だしたら止まらない」ということ。1話45分のDVDを6話分観れば、その時間は270分＝4時間30分。日常的な弁護士業務の合間に試写室へ通い、その評論を書いている私にとって、自宅はホントに寝るだけの存在。したがって、そんな自宅でDVDを4時間30分も観るとなると早朝か深夜にならざるをえないから、それが続くと昼間の業務に影響が出てくる危険性がある。まして、1話45分のDVDを95話まですべて観ようという「野望」を持てば、そりゃ大変。

『三国志』はとにかく面白い。1～6話だけでもこれだけ興奮するのだから、全95話を観ることができれば、そりゃ最高。したがって、是非皆さんは全95話に挑戦していただきたい。しかし、その場合はくれぐれも睡眠不足にご用心！

2010（平成22）年10月22日記